

小、中、高校生の生活時間の意識と実態
—社会的・文化的生活時間を中心にして—
森村学園 ○池田真由美 静岡大教育 吉原崇恵

目的 学校五日制の完全実施を控え子どもたちの生活時間学習のあり方を研究するにあたり子どもたちの生活時間の実態と満足度を明らかにする。

方法 各学校段階に応じた生活時間分類を作成し即日記録依頼法で行った。静岡県内で地域特性を考慮して対象校を選定した。小学校3校、中学、高校各2校、有効回収数はそれぞれ107、152、192である。調査は1992年11月と1993年11月である。

結果 小学生は総じてよく遊びよく学んでいる。特に休みの土曜日は他の休日に比べ睡眠時間を少なめにし、友だちや家族と活発に過ごしている。遊び時間には自然環境の如何にかかわらず親の教育方針が影響を与えているといえよう。中学生は勉強重視の睡眠不足である。休みの土曜日には寝だめをし、拘束時間の長い平日の社会的・文化的生活時間は少ない量でできる受動的なテレビの視聴で過ごしている。高校生にとって休みの土曜日・日曜日はエネルギー補給日であり、社会的・文化的生活時間は量と心の余裕がある時に能動的な内容になる。また、共通点として社会的・文化的生活時間の量的・質的なあり方は一日の生活の満足度を左右し生活のリズム、計画性、充実感など生活時間の質を表している。それが自立に向かう発達段階において時間という意味理解につながり、将来の生活設計へと発展できるのではないかと考えられた。